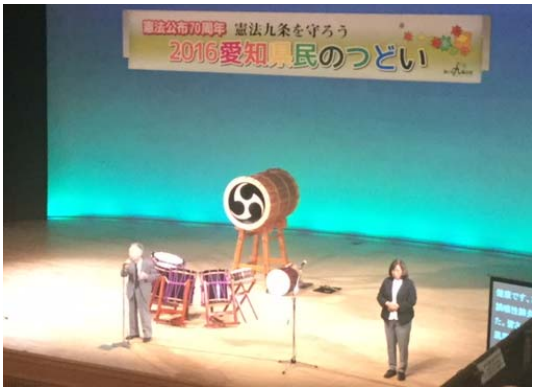
「憲法のつどい」と水田洋先生

まず､5 日レポート｢憲法公布 70 周年　憲法九条を守ろう　2016 愛知県民のつどい」を補足しておく。4 日の朝日新聞朝刊で、岸井成格さん講演が次のように紹介してある。岸井さんの心からのメッセージを伝えている。

「安保法制などを巡り、安倍政権は巧妙かつ執拗に報道機関に『自主規制』を促してきた。報道が、憲法によって権力を縛る『立憲主義』のチェック役を果たせるよう、新聞記事でもテレビのコメントでもしっかりしたものには応援メッセージを送ってほしい」



この集いで、水田洋先生が開会挨拶をされた。水田先生は主催者「あいち九条の会」の代表世話人である。司会者から水田先生は 97 歳と紹介されると、会場から「どよめき」と拍車が続いた。

水田先生は拍手にこたえて、まず「健康です」とよく通る声で挨拶。写真のように難聴者のかた向けに設置されている集団補聴装置(アシストホ―ン)にも、「健康です」と映っている。話は戦争と戦後の先生の「思い」から始まる。

朝日新聞 10 月 14 日朝刊「語り継ぐ戦争 27」で、軍属として占領下のインドネシア・ジャワ島に派遣された先生の長文インタビューが掲載されている。

インタビュー最後から。「帰国すると、僕を送り出した後輩たちが学徒出陣で、大勢死んでいた。妹の婚約者もトラック島で戦死した。名大経済学部で長く教えたが、愛知万博や安保法制を始め、言うべき時には言おうと決め、ヒューマニズムと合理主義で行動してきた。」

天皇制、最近の天皇からの「象徴天皇」の問いかけにどう応えるか。ここで水田先生は、インタビューで「名古屋五輪反対」も話したが、記事ではなぜかカットされていたと朝日新聞に苦言を呈した。私もこの記事を読んだとき、どうして五輪のことが書かれていないのか不思議に思った。この地域における水田先生の社会的な活動を語るうえで、先頭になって活躍された「名古屋五輪反対」運動は欠かせない。先生は肥大化した東京五輪の混乱についても触れられた。

東京の府立一中の一年にうえにいた加藤周一さんについて語る。前に紹介した先生の『ある精神の軌跡』に書かれている。「九条の会」での出会い、加藤周一さんの「合理主義」について話され、「ヒューマニズムと合理主義」で立ち向かうことが大切だと。さいごに、「まだ負けてはおれない」と述べられたのが、心に深く残った。

(2016 年 11 月 8 日)